

体内で過剰になると、骨粗しょう症や関節リウマチを起こす「破骨細胞」をつくる酵素を、高柳広・東京医科歯科大教授(骨免疫学)らのチームが発見、七日付の米医学誌セルに発表した。人でこの酵素の働きを抑える物質が開発できればこれらの病気の治療薬につながる可能性があるという。

破骨細胞は骨を吸収する役割をしており、骨をつくる骨芽細胞とバランスよく働くことで正常な骨を保っている。

研究チームは破骨細胞で働いている遺伝子を網羅的に解析。

「破骨細胞」つくる酵素発見

骨粗しょう症治療に道

「Btk」と「Tec」という二つの酵素をつくる遺伝子の働きが高まっていることを見つけた。

遺伝子を欠いたマウスを作製したところ、破骨細胞がつかず、骨がすき間なく埋まり強度が低下する「大理石骨病」を

医科歯科大など

発症。研究チームは、二つの酵素が破骨細胞を形成する役割をしていると判断した。二つの酵素の働きを抑える薬剤を、関節リウマチや骨粗しょう症を発症させたマウスに投与したところ、症状が改善したという。

東京新聞
2008年3月7日(金)

高柳教授